



なく、進み住民への獲得に協力し始めた。共同作業の始まりだった。そして、強力な協力者を得た見ノ口公園歴史文化事業は、工事着手に向け大きく動き出した。住民委員会を始めから既に3年の月日が暮っていた。

●野嵐景と現場監督

工事は平成9年から2ヶ月を要した。昔の原野景を知者がおじいちゃん通いは、工事においても大きな方となった。川や里山を改めてつくることは非常に難しく、設計図面はあって無いようなものだった。そこで覚悟したのが、昔の記憶だった。数多くの現場監督を付けた工事は、並地が田んぼになるなど多少の変更は余念なくされたが草園に進めることができた。卒かて工事完了も近づいていくが、おじいちゃん達には自ら手掛けた公園であったため関心が強く、「見ノ口公園愛護会」は枯枝、庭園づくりには、苗と変遷会とが協力して、約300本の苗木を地域住民の手で植える種づくりを行った。更に、工事完了後の管理の重要さを理解し、工事完了後は、「見ノ口公園管理協会」を設立。地域住民の手による公園管理の始まりだった。

●市街地の再活性化

工事完了後90年目を迎え、現在では花見の会に始まり、田植え、コンサート、ホテルの会、稲刈り餅つき大会など多種多様な催し物が住民の手により開催され、新年にお祭りまで選別した。

見ノ口公園は、豊田市の中心市街地のまろづくりに、なくてはならない施設のひとつとなっている。

2. 特筆したい点

●東物建設

市街地での生物多様性空間を創出するには、特定の種(特に春虫)が増殖するような状況をつくらないようにはなればならない。工事地の状況を近藤博隆氏から聞き取り、専門家の意見を踏まえ、バイオフェッド研発会での講習交換会などにより、上手に東物建設が出来る方向へ導くための環境づくりを促した。現在も、豊田市矢作川研究所(市長殿)により定期的に生物多様性調査を実施している。

●住民参加

都市公園の野生化には、種々の管理が必要であり、住民管理が不可欠である。しかし、工事の発注は、最低条件を整えただけのスタートであり、多くの調査、後遺症などを繰り返しながら管理方法を確立し、完成に近づいていく。つまり、作業の中で野生化する公園を手掛け管理していくことは、大変難しいことである。しかし見ノ口公園は、地域住民の熱意により、地域住民の手により年々若者らしい公園と成長している。更なる5年後10年後が楽しみな公園である。

3. 最後に

行政側の勝手な提案から始まった見ノ口公園をここまで育て上げていたたい地域住民の方々一人一人に敬意を委し拍手を送り、また今後とも本心く愛していただくことを懇願し結びとす。



1. 事業の道のり

●あらすじ

愛知県豊田市は、トヨタが自動車の本社があり、速くは松平家三河の国として築えてきたまちである。このまちの中心市街地の中、駅から歩いて10分程度のところには「鬼ノ口公園」が整備されている。それまでは河の交差点もないごく普通の都市公園（近鉄公園）であったものを、「水と緑のまちづくり」を目標に、生態系に配慮した正産により再活性化をした。リカレンシユした公園は、市街地に住む人々にやさしさをと授けたいの場を提案しただけでなく、中心市街地のまちづくりにも大きな一役を担うことになった。

●日本の正しい都市公園

戦後まもなく、市街地の中に用水兼歩水路として利用されていた「五六川」という小川が流れていた。やがて市街地の拡大に伴い、昭和30年代半ばの土地区画整理事業によりコンクリート化された。面積約10haの都市公園「鬼ノ口公園」をつくるための遺産地上に、より「五六川」は暗渠化された。公園には、前徳ブールや野球場が整備され、小さいながらもアスレチックやジャンダルム、滑り台なども整備された。「鬼ノ口公園」は昭和50年代に近代都市公園の根本的な施設を備えて誕生した。

●小川の再活性化

平成3年頃、豊田市は「水と緑のまちづくり」をテーマとして、まちの中に水と緑のネットワークを創出する

事業を要望していた。この頃の「五六川」は、水溜のほとんど無い都市下水路と化し、汚れた家庭排水水が流れていた。豊田市は、市中心部を南北に流れる、一級河川矢作川を管理する建設費にも、まちづくりへの参加協力を求めた。そして、矢作川の水を少し供給してもらおうとなり、矢作川のきれいな水を、中心市街地に流れる「五六川」などに浄化用水として流される事業（矢作川浄化用赤穂入事業）が決定した。しかし、国子愛知省は、大勢な水の具体的な利用案を求めた。これに対して豊田市は、都市地区に生物建造空間を創出することを提案。その一環として、鬼ノ口公園の下に暗渠化された「五六川」（延長約200m）を復活することを考え、赤（五六川）と緑（黒山）のまちづくりを具現化するため鬼ノ口公園再活性化事業がスタートした。生物の食費建設費が可能な様、且指すは「都市公園の野変化」。行政は、平成1年から地域住民への事業説明会を開始した。

●難題の住民説明会

長年見慣れた風景を壊し、思い懼れた施設を壊すために住民の理解を得るには、多少の抵抗があるのはごく当たり前のが、今回の公園整備事業の説明土音は、また元に戻すことへの理解を求めることだった。このためか、地域住民からの抵抗は予想以上に大きく「公園の野生化」の意味が理解出来ないうま一年が過ぎた。引き継ぎ2年目に入り、徐々に事業に理解を示し始めてきたのは、昔の原風景を創っている「おしいまん荒」だった。やがて、住民説明会でも「おしいまん荒」は、市側の意向に賛同するだけで